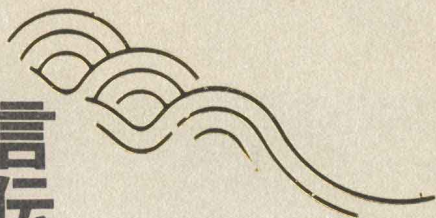
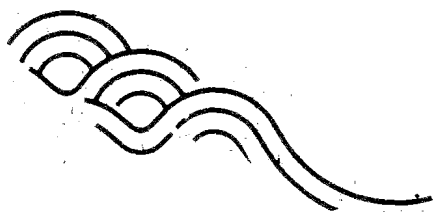


川村湊  
近世狂言  
綺語列伝

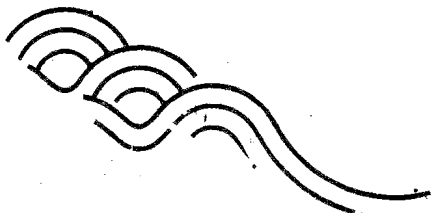


江戸の戯作空間 福武書店

# 近世狂言綺語列伝



川村湊 福武書店



# 近世狂言綺語列伝

— 江戸の戯作空間

一九九一年十月十日第一刷印刷  
一九九一年十月十五日第一刷発行

著者 川村 湊

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社福武書店

東京都千代田区九段南二二三二八  
〒103 電話(03)3133-0111  
振替口座(東京)六一〇五〇九七

印刷・製本 共同印刷

(落・乱丁本はお取替え致します)  
(定価はカバーに表示してあります)

川村 湊 (かわむら・みなと)  
一九五一年北海道生まれ。法政大学法学部卒業。「異様なるものをめぐって」で第23回群像新入文学賞評論部門優秀作を受賞。八二年から四年間、韓国・釜山の東亜大学校で、日本語・日本文学を講ずる。著書に『酔いどれ船』の青春(講談社)、『異様の領域』(国文社)、『アジアという鏡』(思潮社)、『異郷の昭和文学』(岩波書店)他。

## 目次

一 黄表紙王国の崩壊

恋川春町その他

7

二 遊ぶ京伝

山東京伝

27

三 美少年と悪少年

曲亭馬琴『近世説美少年録』

55

四 異類と異界の物語

馬琴『南総里見八犬伝』

79

五 馬琴の島

馬琴『椿説弓張月』

103

六

浮世の三馬

式亭三馬

129

七

歩く一九

十返舎一九

153

八

悪女のドラマツルギー

鶴屋南北

185

九

蝶恋花の物語

為永春水

209

江戸戯作年表及び使用テキスト一覧

あとがき

235 231

裝幀 東幸見

近世狂言綺語列伝







# 黄表紙王国の崩壊

—恋川春町その他



『辞蘭戦新根』(都立中央図書館所蔵)

天明以後の作者たちはみな黄表紙きびょうしに手を染めた。黄表紙の代表的な作者であった恋川春町こいかわはるまち、朋誠堂ほうせいどう喜三二きさんじ、芝全交しばぜんこう、唐来参和とうらいさんなはむろんのこと、絵師と作者の二役をこなし、黄表紙、洒落本しやれほん、読本よほんのいずれにおいても天才的だった山東京伝や、黄表紙作者としてはあまり才なく、やがて新興の読本の一流作家となった曲亭馬琴、同じように合巻ごうかんや滑稽本にその才を開花させていった式亭三馬や十返舎一九、さらに葛飾北斎までも黄表紙作者として名を連らねている。江戸の天明、寛政年間はまさに黄表紙の全盛時代であり、その時代に遭遇した才能は、とりあえずはその才の向き、不向きにかかわらず、黄表紙作者として登場せざるをえなかったといえるのである。

絵と文章の組合せによる、大衆的な娯楽作品としての絵本。滑稽、うがち、くすぐりといった要素を追った黄表紙というジャンル（出版形態）は、その出発からサブ・カルチャー、カウンター・カルチャーの性格を刻印されずにはいかなかった。黄表紙の嚆矢こうしと掉尾てうびとははつきりしている。安永四年（一七七五）の刊行の恋川春町の『金々先生栄花夢きんぎんせんせいえいがのゆめ』を最初として、式亭三馬が『浅草観音利益仇討せんそうくわんおんりやくのあだうち』を合巻仕立てとして出版する文化三年（一八〇六）までのほぼ三十年間、黄表紙は娯楽文芸の雄として書かれ、刊行され続けてきたのである。

このようにその始まりと終わりとははつきりと示されるといふ文芸ジャンルの存在も珍しいだろう。それに短歌や俳句や小説、あるいは川柳や狂歌に較べても「三十年」という寿命は短かすぎる気がする。

る。黄表紙の盛衰は一つの文芸ジャンルの消長ということだけでなく、江戸の文学意識そのものの栄枯盛衰を象徴的に表現している。それは日本の近代（近世「モダン」）文学の一つの圧縮された、勃興から隆盛、そして没落、崩壊という「全過程」を表しているものであり、これほど鮮明に社会と時代の言語意識と文芸作品、社会的規制と禁圧とが、直接的に文芸作品にその変質をもたらしたということも珍しいのではないかと思われるのである。

もつとも、私はここで社会的環境、時代状況の変化が、直接的に黄表紙の変質、そして没落をもたらしたという「社会決定論」にはやや違和感を持っている。たとえば、田沼時代から松平定信の登場による寛政の改革が、黄表紙などの大衆的な文芸について大きな規制、規範力として働き、事実そうした「整風運動」によって有力な黄表紙作者たちが、筆を折ったり、筆禍に遭ったりという現実的な影響が現れ、武士作者であった恋川春町と朋誠堂喜三二とがともに創作の現場から離れる（春町は召喚されるが、まもなく病死。自殺説が流れる。喜三二は主君の命により筆を折り、喜三二の号を他人に譲り渡す）という事態が引き起こされるが、そのこと自体が黄表紙という文芸ジャンルの本質的な部分を変質させたとも、また大きくその価値を減失させたとも思えないのである。

黄表紙の変化、そしてその没落という現象は、黄表紙自身の内部的な問題だったのではないか。それは社会的な外圧を語る前に、まず黄表紙というジャンルに内在する問題としてとらえるべきではないのか。黄表紙は明らかに収縮と拡散という二つの過程を経て、やがて雲散霧消した。収縮期には恋川春町、朋誠堂喜三二、芝全交、唐来参和などの、もっぱら黄表紙のみにその才を傾けた作者たちが

いた。拡散期には、京伝を筆頭として馬琴、三馬、一九などの作者が輩出した。拡散期の作者たちは黄表紙的な問題意識、文芸意識を先鋭化することによって、それぞれ洒落本、読本、合巻、滑稽本といった別の形態、別のジャンルの文芸（戯作）の創作へと抜け出して行った。「黄表紙王国」の崩壊とは、こうした収縮と拡散という運動の最終過程を表現するものとして語られなければならないのである。

黄表紙の嚆矢である恋川春町の『金々先生栄花夢』。まず、ここから黄表紙の黄表紙たる特質を抽出してみよう。この作品は、謡曲『邯鄲』として知られる中国の故事である。「盧生一炊の夢」（唐代小説『枕中記』の物語を縦糸とし、「金々先生」という当時の流行語（現在風にいえば、まさに金ピカ先生ということになるだろう。金満家であり、流行りのファッションによって身を飾った当世流洒落男といった意味である）の世界を横糸とし、盧生の夢の一種のパロディーとして創作されたのである。

片田舎に住む金むらや金兵衛という男が、「生まれつき心優にして浮世の楽しみをつくさんと思えども、いたって貧しくして心にまかせず。よってつくづく思いつき、繁栄の都へ出て奉公をかせぎ、世に出て思うままに浮世の楽しみをきわめん」と思い立って、江戸に上ろうとする。途中、目黒不動に寄って参詣しようとするが、空腹になったので名物の栗餅を食べようとする。栗餅屋の座敷で餅の出来上がる間、金兵衛は旅の疲れもあって、うとうとと眠りに入る。以下はその夢の中の出来事である。

神田八丁堀の豪商・和泉屋の番頭がたくさんの手代、小僧を従え金兵衛のところに来て、仏

のお告げで当家の跡取りとして迎えにきたという。行ってみると、目の覚めんばかりの豪邸で、主人と親子の縁を結ぶ。金兵衛は家督を継ぎ、何一つ不自由のない身となり、毎日酒宴という日が続く。人は皆、彼を「金々先生」と呼んで持てはやす。吉原へ行ってお大尽遊びをし、さらに深川、品川といった岡場所に入り込み、遊蕩三昧を行なったため、とうとう義父から勘当され、もとの着のみ着のまま家を追ひ出される。立ち寄るところもなく、途方に暮れているうちに、栗餅の杵の音に驚いて目を覚ましてみれば、まだ栗餅の出来上がらない間の一瞬の夢だったというのである。

いかにも「浮世」という言葉が流行言葉となつた江戸後半期の世相にふさわしい話といえるわけだが、このように醒めてみればすべては夢だったという趣向が、黄表紙というジャンルにおいて、パターンとか紋切型ということさえ陳腐なほどに、繰り返し登場していることは注目に価するだろう。十返舎一九の黄表紙『化物太平記』の発端には「作者の夢を見るやつもよくある趣向古けれど」という言葉があつて、夢と黄表紙とは不即不離といつてもいいほどの関係があつたといえるのである。同様の趣向としては、京伝の『京伝憂世之酔醒』のように狐に化かされていた、あるいは『江戸生艶氣樺燒』のように周囲の人々のお芝居によつてだまされていたというのがあつて、こうした「オチ」こそ、黄表紙的な趣向に沿うものであると考えられていたと思われるのである。

もつとも、江戸のどんな素朴な読者といえども、滑稽さと笑いを狙つた戯作絵本にシリアスな願望や、リアルな夢を託するようなことはしないだろう。金々先生や京伝や艶二郎が夢を見るのは、それがあくまでも「夢の国」であることを、作者も読者も十分了解している範囲内においてであつて、黄

表紙というジャンルは、まさに「醉生夢死」の浮世を描き出したものにほかならないのである。

ところで、『金々先生栄花夢』には、この後に続出することになる黄表紙の基本的な特徴が、すでにほぼ出揃っていると考えることができる。一つには、唐来参和の『順題能莫切自根金生木(まわりのよいなかのねからかねのなるき)』や京伝の『孔子こうし縞于時藍染じまきにあいぞろ』の趣向にある「あべこべ」の世界という発想を基本としているということで、現実の世界を一回だけ単純に裏返し、逆転してみせた世界こそが、黄表紙のホーム・グラウンドというべきなのである。俗人が聖人となり、人が金銭を嫌悪し、富裕を厄介に思う「浮き世」。あるいは努力や辛苦ではなく、偶然や幸運、強運がもたらす栄耀栄華。これはむしろ「憂き世」としての現実世界の単なる裏返しであり、動物と人間の世界、男と女の世界とを互いにあべこべに取り変えるといった、単純で素朴な逆転の発想法にしかすぎないのである。

もう一つは、前にも述べたことだが、「金々先生」といった流行語、当時のまさに最新流行の言葉が、その作品世界の趣向と切り離せない大きな要素としてあるということだ。これは流行語だけではなく、地口、駄洒落、語呂合わせ、成句、モジリといった言葉遊びの要素として、黄表紙には欠かせないものとなっており、喜三三の『おやのかたきとまはらつふ親敵討腹敵』のように、ウサギが一刀両断されて「ウ(鶉)」と「サギ(鷲)」とになって飛びたって行き、その鳥がウナギとドジョウを吐き出したから、「へど前(江戸前のモジリ)大樺焼」となったというような「洒落オチ」の作品をも多数輩出させたのである。

こうした「言語遊戯」的な趣向を極限的に推し進めたものとして、私はやはり春町の黄表紙『ことばと辞闘戦いあららしい新根』という作品を挙げておきたいと思う。これは安永七年に出版されたもので、黄表紙の嚆矢といわれる『金々先生栄花夢』からわずか三年後のものである。これは当時江戸市中で流行り言葉となっていた「大木の切口太いの根」「どら焼・さつま芋」「鯛の味噌ず」「四方のあか」「一杯飲みかけ山のかんがらす」「放下師の小刀のみこみ印」「ならずの森の尾長鳥」「天井みたか」「とんだ茶釜」といった地口、語呂合わせ、洒落言葉が主な「登場人物」たちで、これらの「流行語」たちが、日頃自分たちを酷使して商売としている草双紙の関係者、すなわち画工や彫師、草紙屋、板木屋などから挨拶一つないことを怒り、一同で懲らしめようと相談がまとまるところから始まるのである。

そういう意味では、これは「異類合戦」ものや「化物退治」ものといわれる、人間ならざる動物や器物、観念などの「化物」（異類）たちが合戦、戦いを行なうといった、黄表紙以前の赤本・黒本の草双紙類の趣向を取り入れたものといえるだろう。明和期を中心として黒本の『化物曾我物語』『金平化物退治』『化物秘密問答』『化物大福帳』『化物役者附』などの書名が『日本小説書目年表』（近代日本文学大系・第二十五巻）には見られ、その中の『化物とんだ茶釜』といった書名は、春町がこうした黒本をプレ・テキストとして『辞闘戦新根』を創作したという事情を明らかにするだろう。流行語を擬人化するという発想は、必ずしも春町の独創とはいえないのである。



春町自身もこの『辞闘戦新根』の前に、「うどんそば」という角書のある『化物大江山』(安永五年)という黄表紙を書いている。これは「そば掻きの院」の御代に武将「摂津守源のそばこ」が、四天王の「渡辺のちんび」「碓井のだいこん」「卜部のかつおぶし」「坂田のとうがらし」を率いて、「よそば童子」の頭領である「とんだ山」の「うどん童子」を退治するという、源頼光の酒吞童子退治譚のパロディーだが、これは黒本の「化物退治」から黄表紙の滑稽、パロディー、見立てものへの転換を示す作品といえることができる。もちろん、ここには「京阪は饅飽を好む人」が多く、「江戸は蕎麦を好む人」が多いという「東西」の差を念頭に置いたものであり、春町の江戸最良、蕎麦最良が作品世界の底流にあることはいうまでもないのである。

『辞闘戦新根』も、こうした「うどんそば」の擬人化と同様に、流行語そのものの擬人化がなされているわけだが、しかし同じように発想されながらも、うどん・そばの類いと言葉としては、その現実の社会、時代を映しだすという意味合いにおいて、大きく異なっているといえることができるのではないかと。「大木の切口」がまずこういう。

「そもそも我を始として手下のものども、かりそめに草双紙にいでしより、諸人あまねくその名を知り、寝惚先生ねぼけの詩集にもいで、芝居でも引ごとにいわれ、誰あつて知らぬ者なし。しかれば我々は、草双紙の氏神、中興の開山なれば、画工はもとより、草紙屋、板木屋、我々をあがむべきを、ぬるい茶一ぱい飲ませたることなし。よってこの春は珍しき化け様して、職人どもを見しらせん」と発議するのである。

ここで、画工、草紙屋、板木屋は出てくるけれど、肝心の言葉そのものを取り扱う「作者」が出て